からこかぎ

第１４号　平成２８年　６月　８日（水）発行

唐古･鍵遺跡の保存と活用を支援する会
〒 636-0247　奈良県磯城郡田原本町阪手 233-1　唐古･鍵考古学ミュージアム内
℡ 090-9257-3688　Email：karakokagijimukyoku@swan.ocn.ne.jp

定期総会挨拶

会長　今西和代

本日は、お忙しい中、唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会の平成 28 年度定期総会にご出席いただき、ありがとうございました。選任いただきました運営委員を代表して、一言ご挨拶を申し上げます。

皆様のお力のおかげで、昨年度末の会員数も 70 名を越え、発足時以来最大の会員数を持続させていただいております。ボランティア活動や組織は、ややもすると短時間で衰退、解散する事例も多いと聞きます。本会は、おかげさまで 12 年を迎えることができました。これも皆様の日ごろのご尽力のおかげと感謝申し上げます。ありがとうございます。

私ども運営委員一同、今年度も本総会で決定された活動計画にのっとり、唐古・鍵遺跡の保存と活用に係わる支援事業の一層の充実を図る所存でございます。とりわけ、重点事業とご指定いただいた土器作り・勾玉つくり・火熾し体験などの総合学習支援活動や古代ものつくり体験活動および弥生ウォークは、昨年同様に積極的に実施していきたいと考えております。

いずれの活動も２年後に開園する唐古・鍵遺跡史跡公園でのボランティア活動のキーとなる重要な活動と思われます。それは、先日、田原本町文化財保存課が募集した「唐古・鍵遺跡史跡公園ボランティア」第２期生の案内に例示されている活動内容がそれを示しています。そこには、「火熾し・土器を使った炊飯など体験学習、遺跡・遺構展示室のガイド、弥生関連の花や米などの栽培、唐古・鍵遺跡に関係したイベント企画」などと記載されています。いずれの活動も、私たちが 12 年間蓄積してきた活動と密接不可分の分野です。いよいよ、会の創立以来蓄積してきたノウハウを必要とする時期が迫ってきており、本年は、２年後の開園に目指してそのノウハウに磨きをかける重要な時期となっております。今後とも、引き続き、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

最後に、先ほどの活動計画の中でふれております「次世代につながるノウハウの継承」の件につきお話をしたいと思います。私どもの活動も創立して 12 年を経過し、当然、私どもも、年々、歳をとるわけでございます。会員の平均年齢は、統計はとっておりませんが 65 歳をこえているのではと思われます。私どもは、何とか、次世代を担う会員の誕生を願っておりまして、そこで重点事業と位置づけた「活動のノウハウの継承」にも積極的に取り組んでいきたいと考えた次第でございます。今後とも、よろしく、ご協力のほどお願いいたします。

お願いすることばかりで、恐縮でございましたが、私のご挨拶とさせていただきます。

本日は、ご多忙のところ、ありがとうございました。　（平成２８年４月 16 日）

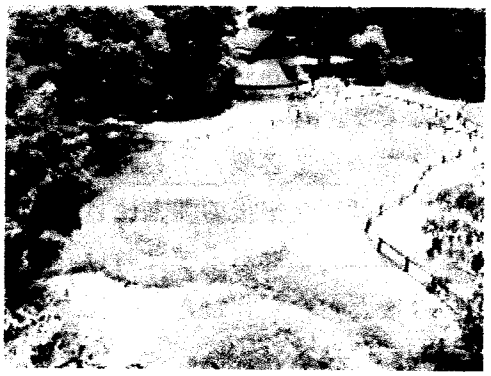
遺跡紹介　登呂遺跡

会報編集メンバー

今回は、特別史跡の「登呂遺跡」を紹介します。特別史跡とは、史跡のうち学術上の価値が特に高いと評価され、文化財保護法により指定されたもので、弥生期の遺跡としては長崎県原の辻遺跡（2000年指定）と佐賀県吉野ヶ里遺跡（1991年指定）の3件のみです。特別史跡は、有形文化財の「国宝」と同等といわれています。

登呂遺跡は、はじめて生産域、居住域などの弥生時代の集落モデルを提示したとして1952年に特別史跡に指定されています。

（登呂遺跡　住居址）



しかし、登呂遺跡も戦後直後の発掘調査から60年（当時）を経過し、他の遺跡の発掘調査の成果から、登呂遺跡が提示していた集落像に疑問点が多く提示され、遺跡の注目度も低下していました。そこで、静岡市は、平成11年～15年にかけて再発掘調査を実施し、その発掘成果をもとに遺跡公園を再整備し、さらに博物館をリニューアルしました。今回は、その再発掘調査の成果を中心に報告します。

1　遺跡の位置

遺跡は、静岡平野の南東部(市街地に南)に位置し、西方向を流れていた旧安部川が形成した海抜7mの扇状地端部に位置し、背後は3000m級の赤石山脈に繋がる山地になっています。再調査で改めて自然科学的分析がなされ、「全体的には低湿だが居住地周辺では畑地雑草も検出されるやや乾燥した環境」でイネ・ウリ・ヒョウタン・トウガン・モモなどの栽培植物の花粉・種子分析が報告されています。また、再調査でも温帯ジャポニカと唐古・鍵遺跡でも出土している熱帯ジャポニカが見つかっています。

2　旧調査の内容

旧調査では、居住域は12棟の住居と2棟の高床倉庫から構成され、その南側には、国内初の水田遺構(杭と矢板の護岸施設と50枚の大規模区画の水田と灌漑水路)が発見されました。住居と倉庫の数量の違いから高床倉庫を集落全体のものとし平等な社会構造と規定し、水田址からは稲作を中心とした集落モデルが提示されました。

3　再調査の成果

(1)　集落の時期

旧調査では遺跡の存続期間は、弥生後期の限られた時期(土器1型式の期間程度)とされていましたが、再調査では北側にある谷状地形の洪水堆積土の層序などから、Ⅰ期（弥生後期初頭＝集落の整理期）とⅡ期（後期前半、洪水の襲来まで）の生活面が確認され、居住域では3時期、生産域では4時期にわたり継続していることが確認されました。また、土器も4段階に編年区分されました。

(2)　居住域

新たに、居住域の東側を再発掘し、後期中葉に同時存在した5軒の竪穴住居、3棟以上の掘立柱建物(倉庫)と1棟の独立棟持柱の大型掘立柱建物(26・6 ㎡祭殿)が確認され、居住域がさらに東に伸びることが予想されました。ここで注目した点は、住居と倉庫がほぼ同数であることから生活と消費単位が独立していることと、大型掘立柱建物の存在から集落全体の協働行為(住居の築造、祭祀行為など)が想定されること

です。

なお、新旧調査いずれからも壁材が出土しており、スギの板材(羽目板)でした。再調査では、板材とその据え跡の有無が住居の同時存在の重要な判断材料となりました。

(3)　生産域

旧調査の水田遺構は後期後葉～末の洪水後のもので、水田域から新たに３回以上の洪水堆積土が確認され、検出された後期中葉の一連の居住跡と時期が異なることが分かりました。

一方、北側の谷地形(小河川)からの導水路から居住域・水田域の区画溝を経て中央水路にいたる灌漑水の排水システムも新たに判明しました。さらに、小区画水田の存在も新たに確認されました。

しかし、残念ながら、今回の再調査でも墓域は、見つかりませんでした。

(4)　遺物

旧調査と同様、木製品の出土が多く、農耕具のみがカシなどの広葉樹ですが、それ以外の建築部材や容器、祭祀具、丸木舟はすべてスギ材を使用していました。石器は、磨製石斧の出土量は少なく、特に、上層遺構からはほとんど出土していません。鉄製品は未出土ですが、銅釧と小銅鐸は出土しています。

４　唐古・鍵遺跡とのかかわり

唐古・鍵遺跡は、登呂遺跡より10年前に発掘調査がなされています。その第１次調査では、金属器の使用、稲作の痕跡、弥生土器といった弥生期の重要な文化要素が発見され、初めて今日の弥生史観を形成した価値ある遺跡です。最近は、各地の多数の発掘成果から、弥生文化の見直しの論議が活発になっています。残念ながら、その中では、唐古・鍵遺跡を例とした論議は余りありません。第１次発掘調査から80年を迎え、特別史跡に相当する価値を有している唐古・鍵遺跡は、登呂遺跡と同じような課題に直面していると思います。

遺物紹介（10）～壁材

会報編集メンバー

今回は、ミュージアム第２室に展示されている「壁材」を紹介します。壁材は、遺跡中央区の第53次調査で出土しています。

同調査は、遺跡を南北に繋がる通学道路の建設に伴う調査（南北94m幅2.5mの調査区）で、湧水が多いため前期の地層面は限られた調査となっています。

その中でも、南と北の谷地形に形成された川跡２条（その間が微高地40m強）が検出されました。その川跡より前期中葉の土器、獣骨・木製品・石包丁などの石器・網枠等生活関連遺物が多く出土しています。弥生前期とされる壁材は、発掘報告書には記載されていませんでしたが、新聞報道（H8・5・27奈良新聞）によると、その川跡から出土したとされ、当時は大きな反響を呼びました。

(1)　中央区

まず、出土位置を確認します。従前は、唐古・鍵遺跡の地形区分は、微高地の南・北・西区を中心として集落が形成され、中央区は低湿地と評価されていました。しかし、第53次をはじめ第50次や第98次調査などの中央区の調査からは南北に落ち込みがみられ、先ほどの出土遺物にみられるとおり調査地区中央は前期から積極的な活動域となっています。さらに、前期末の洪水により谷地形が順次埋没し、中期中葉をピークに積極的な居住域として展開し、中央区周辺からは、竪穴住居跡がいくつも検出されてい

ます。しかし、中期末の洪水後には、遺構・遺物が少なくなり後期には空ろな空間となっています。

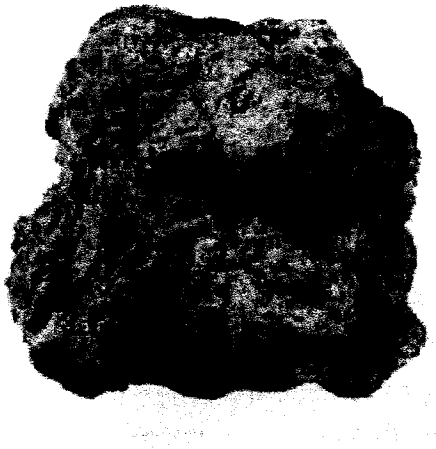
いずれにしても、中央区は、第３次調査以来の北・西・南地区の微高地を中心とした集落構想に修正を迫るエリアとなっています。

(2)　壁材

新聞報道などによると出土した壁材は、最大で手のひらぐらいの大きさで、内部にワラが混じり芯にした棒の圧痕が縦横に組んだ状態で出土したとのことです。

コンテナ25箱ということですからかなりまとまった出土量です。被熱しているとのことですが、被熱していなければ、土に戻り出土していないと思われます。残念ながら、壁材に相応する掘立柱建物の柱穴は検出されていません。

（唐古・鍵考古学ミュージアムHPより）



(3)　大壁建物

縄文期の壁材は、富山県小矢部市桜町遺跡の縄文中期の掘立柱建物の壁材がよく知られています。クリの横木にスギの薄板を編みこみ、それに植物樹皮や葉で覆った網代状の壁ですので展示壁材とは明らかに異なります。

一方、古墳時代後期から多く見られる土壁で塗り固めた建物は、「大壁建物」と呼ばれ、朝鮮半島からの伝来と考えられています。

従来は、最古のものは５世紀前半のものとみられる石垣を伴う大壁建物が検出された奈良県御所市の南郷遺跡柳原地区（コ字形に巡る溝に70cm間隔の径20cm柱穴）とされていました。

また、滋賀県南部に比較的多く検出され、大津市の穴太遺跡周辺の渡来系集落にみられます。最近では、滋賀県高島市の天神畑遺跡から方形周溝状遺構が４基検出されました。そのうちの２基については溝が方形に取り囲み、溝の底には柱の跡と思われる穴が多数連なっていることを根拠に古墳時代前期（４世紀後半～５世紀初め）に遡る大壁建物とする意見もあります。現在、大壁建物の研究は、発掘事例が少なく、慎重に検討がなされています。いずれも柱穴を根拠としており、壁材の出土はありません。

弥生期では、おびただしい建築部材が出土した島根県青谷上寺地遺跡ですが、壁材は1290点出土していますが、すべてスギ材を中心とした壁材でした。今号で遺跡紹介された登呂遺跡(1－49号)住居の壁材は、板材です。大阪府古曽部・芝谷遺跡の周溝内に下端を埋めて内側に折れ曲がって倒れた板材（登呂遺跡と長さがほぼ同じ）が出土し、登呂遺跡と同じく周堤の土留めを兼ねた壁板と考えられています。

弥生期の土壁は、唐古・鍵遺跡の１点のみです。

その作り方ですが、先ず、土作りから始まり、粘土にワラや水を混ぜ合わせ腐敗するほどに寝かせた後に、荒塗り→中塗り→上塗りと重ね塗りますが、それには乾燥の期間も必要ですので築造には時間を要します。また、機密性、耐久性、耐火性に強い一方、雨や雪に弱いという特性を持っています。排水機能の弱い集落では地面の接点部分にも工夫が必要だったと思われます。どのような工夫がなされたのか興味がわきます。

いずれにしても、朝鮮半島との関わりが濃厚な北部九州や吉備や丹後地方でも出土例はありませんので、類例の出土を待ちたいものです。

第15回　弥生ウォークに参加して

―鬼虎川遺跡と周辺集落を訪ねて―

大森　初美

大阪平野と奈良盆地の弥生遺跡の違いを確認するために、第15回の弥生ウォークは、初めて生駒山を越えて東大阪市の生駒山西麓の弥生遺跡を訪れました。集合は、近鉄瓢箪山駅で、最初は恩智川の土手沿いを歩きました。途中、桜の根っこから直接つぼみがでているのを見つけ、その生命力に感激しました。また、川辺の菜の花が群生していた景色も圧巻でした。

配布された資料をもとに、訪れた遺跡の思い出をつづります。

まず、恩智川の堤防で何時ものように今回のウォークの中心テーマの説明があり、生駒西麓の弥生遺跡の地形を確認し、後期遺跡が低丘陵地や扇状地を中心に増加している原因を探るということでした。

最初に、北鳥池遺跡に行きました。そこは、扇状地端部に位置しており標高 5～7mでこれより西には後背湿地が広がり、河内平野の中でも早い時期の稲作が確認された若江北遺跡があるとのことでした。遺跡は弥生後期後半の土器が多数出土し溝状遺構もあるとのことです。その後生駒山の方向に歩いて行きました。隣接する段上遺跡、縄手遺跡、上六万寺遺跡は扇状地央部（標高 15～30m）に位置していますが、いずれも弥生後期の複数の住居跡と土器が出土しており、後期になって扇状地央部に後期集落が多数出現したという説明どおりでした。

縄手遺跡には「東大阪市埋蔵文化センター」があり、今回訪れる遺跡の企画展が開催されていてタイムリーでした。収蔵庫で生駒西麓土器や磨消縄文土器を手に触ることができ感動しました。縄手遺跡では、縄文後晩期の住居、石組遺構や多くの土器、石器が出土していて近畿では有名な縄文遺跡とのことでした。私が注目したのは縄文晩期末の長原式土器と弥生前期中段階の土器が出土している点でした。在地の縄文人に弥生文化が伝わってきたのは、縄手遺跡では前期古段階でなく少し遅かったのではないのかなと思いました。

その後、高地性集落といわれている山畑遺跡に行きました。100m の標高ですので、タクシーに分乗しましたが、勾配が急でタクシーに乗っている間はハラハラのし通しでした。山畑遺跡には、「東大阪市郷土資料館」があり、唐古・鍵遺跡出土の遺物との比較という見方で説明を受けました。私は、ミュージアムでガイドをしていますのでとても参考になりました。山畑遺跡からは、縄文早期のナイフ形石器や押型文土器も出土していて、普段見ることのない遺物ですので興味深い展示物でした。

郷土資料館には、鬼虎川遺跡の展示もあり、遺構配置図をもとに説明がありました。墓域は北と北東に集中し、居住域は南の微高地に柱穴や井戸が集中していました。その周辺から貝塚が見つかっていて、弥生期の貝塚ということに驚きましたが河内湖に近いということであれば不思議ではないと思いました。セタシジミを中心とした汽水性の貝が多いということで、河内湾→潟→湖という変化を思いだしました。

山を下って向かったのは、皿池遺跡、鬼塚遺跡です。標高20～30mということで、いずれも弥生後期の住居址が検出されているとのことでした。そこには、縄文期の土器とともに畿内第Ⅰ様式中段階の土器が出土し、縄文晩期土器に籾痕があるということで、同じ扇状地央部の縄手遺跡と同じだと思いました。

新石切駅前で、神並遺跡、植附遺跡、西ノ辻遺跡、鬼虎川遺跡、水走遺跡などは、地形を中心に位置関係などの説明がありました。神並遺跡(標高30m)からは、郷土資料館でみた旧石器、縄文早期の押型文土器や集石遺構、国内最古級の土偶や長原式土器よりも古い船橋式土器が出土する一方、弥生後期の土器も出土するという特徴のある遺跡でした。遺跡は、中位段丘で、他の遺跡と立地と異なっているということで納得しました。特に、私が注目したのは低位段丘に位置する植附遺跡(標高 10m)で、松菊里住居が2棟検出され、弥生前期の古・中段階の土器が大半で、石鏃も8割が香川県の金山産ということで周辺の遺跡と明らかに異なっていました。調査面積が少ないので全容が不明ということでしたが、弥生前期のそれも早い段階の弥生文化の伝来を示すエリアではないかと思いました。

中期になると大規模集落となる扇状地端部の鬼虎川遺跡、低位段丘に属す西ノ辻遺跡からは大溝や方形周溝墓群や青銅器鋳型などが出土していましたが後期には衰退していました。その原因は、河内湖の水位の上昇によると説明をうけ、後期の小規模集落の増加の一因ということでした、後期は、冷涼化が進行する時期でもあり、海退時期と思っていましたので不思議でした。次回も今回訪問した周辺の遺跡を訪れるということですので、確認するためにも楽しみです。

第16回弥生ウォークのご案内

―　池島・福万寺遺跡と周辺遺跡―

井上　知章

1　はじめに

第16回の弥生ウォークは、前回に引き続き生駒山西麓の池島・福万寺遺跡とその周辺の弥生遺跡を訪ねます。今回訪問する遺跡には、前回と異なり旧石器時代の痕跡は見られませんが、楽音寺遺跡、馬場川遺跡、太田川遺跡、花岡山遺跡、水越遺跡、池島・福万寺遺跡などから縄文中期末から晩期にかけての遺構・遺物が出土し、前回弥生ウォークで訪問した生駒西麓の扇状地上の縄文遺跡と同様の分布状況が確認できます。

しかし、弥生期になりますと河内平野を中心としたエリアで活動痕跡が顕著に現れます。前期中葉には池島・福万寺遺跡で水田址が検出され、大竹西遺跡でも墓域が検出されています。中期になると水田址が池島・福万寺遺跡、大竹西遺跡で検出され、水越遺跡では居住域が検出されています。

ところが後期になると、今回は遠望する上六万寺遺跡、船山遺跡、段上遺跡、岩滝山遺跡(高地性集落)や訪れる大竹遺跡、花岡山遺跡、太田川遺跡、水越遺跡、池島・福万寺遺跡、大竹西遺跡、太田川遺跡など生駒山西麓付近を中心に遺跡数が増加し、前回の訪問エリアと同様の傾向を示しています。今回訪問する遺跡の中で重視している遺跡は、水越遺跡、大竹西遺跡、池島・福万寺遺跡です。以下、簡単にそれらの遺跡の概要を報告します。

(1)　水越遺跡　扇状地の末端部(標高 15～20m)に位置しています。遺跡は、東西1.25ｋｍ、南北1.2ｋｍの範囲にあり、平成元年の第2次調査で弥生中期から中期後半を中心とした遺

構・遺物が多くみつかっています。特に、調査地東側の微高地上には集落を区画するＶ字断面の溝(南西―北東)が検出され、居住域はその西側に、東側には方形周溝墓などが検出された墓域があります。一方、南西 100ｍには同時期の自然河道が検出されていることで集落域は反対側の北側に広がることが予想されています。生産域は未検出ですが、大竹西遺跡方向の扇状地末端から西に広がる低地エリアが想定されています。

(2)　大竹西遺跡　遺跡を、東西 1.3ｋｍ、南北 0.35ｋｍの範囲にあり、地形は、東高野街道を境に東側地区は扇状低地、西側地区は沖積地にあたります。重視するのは、遺跡の西側の第１次調査(清掃工場)とその東側に近接する第３次調査(屋内プール)です。第１次の調査地東部には河川跡(南－北)の微高地上から弥生前期中段階の木棺墓(3)、土坑墓(2)、甕棺墓（1）が検出されています。第３次地点からは同時期の旧河道が検出されていて墓域は河川の左岸に位置していたことがわかります。集落域は不明です。しかし、中期中葉になると第１次調査地点からは、水田（19 面）が検出されていて以後後期まで生産域として持続されています。一方、後期初頭には、第３次調査地点の河川が東側に移動し、その西側に自然堤防が形成され、そこからは遺構、遺物が多く出土することから居住域と考えられています。その中の土坑のから鋳造鉄剣が出土し、国内初見ということで大いに話題になりました。今回は、弥生時代の鉄製品も論議したいと考えています。

(3)　池島・福万寺遺跡

遺跡は、河内平野東部に位置し、恩智川治水緑地（40ha）の建設に伴い 30 年を超える調査が継続実施されています。恩智川を境に西側に福万寺Ⅰ・Ⅱ区、東側に池島Ⅰ・Ⅱ区と区分されています。遺跡は、30 面を超える地層に分類され、その多さは洪水による地表面の堆積を示すものです。遺跡周辺には、旧大和川の分流である玉串川と生駒山地を水源とする恩智川、箕後川、長門川が流下していて河川が集中する地区です。遺跡は、河川堆積物から地層を区分できる一方、灌漑システムも明確に残存していることから弥生前期中葉から後期後葉まで継続する水田遺構が確認できます。

一般に、集落は、墓制や住居跡などの分析からその変遷を見ることが多いのですが、今回は、生産域の変遷（灌漑システムの推移）から集落を構成する集団の変容をみたいと思います。

(4)　八尾市立歴史民俗資料館

今回も、ウォークの途中で、「八尾市立しおんじ山古墳学習館」(昼食地点)と「八尾市立歴史民族資料館」に立ち寄ります。八尾市立歴史民俗資料館には、跡部銅鐸の埋納遺構や大竹西遺跡の 700 年間の地層図が展示されています。ご期待ください。

お好みの清酒を選ぶ（タイプⅢ）

植田 洋高

前々回は、国税庁が告示している「特定名称」による分類でした。今回は、前回に引き続き、製造方法の違いを中心に説明します。いずれも商品ラベルに表示されています。ご参考にしてください。

⑦　生一本

単一の製造場で醸造された純米酒であることを示しています。

⑧　低アルコール酒

アルコール度数の低い清酒のこと。消費者のライト志向にあわせて多くの商品が出ています。発泡性のもの、酸味や甘みに特徴を持たせたも

の、濁り酒、樽酒など実にバラエティーに富んでいます。今後も注目商品のひとつです。

⑨　樽酒

いったん杉樽に入れて樽の香をつけた酒。杉の香りが日本酒に合います。

⑩　ひやおろし

昔、寒中に仕込んだ酒を貯蔵し、秋になって味が整ったところを冷のまま樽詰め出荷したことからこのように呼ばれています。季節商品として復活しました。生詰めでいたみやすいので冷蔵されて売られています。常温からぬる燗で香味を楽しめます。

⑪　活性清酒（濁り酒）

清酒もろみを目の荒い布などで軽く漉しただけの濁った酒。もともとは生製品で酵母が生きていて、瓶内で醗酵が続いているという意味でこの名が付きました。最近は、酒質を安定させるために火入れをしたものが多く、生のものは取り扱いに注意が必要ですので、商品ラベルの説明をよく読んでください。

次回からは、日本酒の歴史をその起源から遡って時代ごとにご説明します

事務局からのお知らせ

2016年ものつくり予定案

日　付	内　　容	担当
4月13日	16年ど打ち合わせ他	山本
4月27日	学校支援（勾玉つくり準備）	船木
5月11日	学校支援（勾玉つくり準備）	
5月25日	学校支援（火燃し整備・勾玉つくり準備）	船木
6月8日	学校支援（勾玉つくり）どんぐりかえ 赤米炊成依頼	船木
6月22日	学校支援・粘土カット・鋳型外枠つくり（7月22日電炉焼成依頼）	山本
7月13日	夏休みイベント試作・藍染め	山本
7月27日	藍染め・鋳型内型真土試作	宮崎
8月10日	未定	山本
8月24日～27日	学校支援土器つくり実習・鋳型製作	山本
9月14日	未定	山本
9月28日	スタジー採取・学校支援（粘土カット）	山本
10月5日（水）	学校支援（火燃し整備）穂苅体験	山本
10月12日	文化祭準備・マテバシー採取	宮崎
10月23日（日）	学校支援（火燃し整備）	船木
10月29日（土）	文化祭・弥生生活体験	宮崎
11月9日	青銅器・ガラス鋳込み	山本
11月23日	団栗皮むき・脱穀他	山本
12月14日	遺跡清掃	山本
12月27日（火）	注連縄作り	川端
1月11日	新年行事	山本
1月25日	小学校展示会準備	宮崎
1月27日～2月1日	小学校成果展示会	今西
2月2日（日）	小学校展示会片付け	宮崎
2月8日	未定	山本
2月22日	未定	山本
3月8日	学校支援道具整備	船木
3月22日	学校支援道具整備	船木

会員　訃報のお知らせ

浦田　廣志さん（初代会長）
奥山　節子さん（会員・ミュージアムガイド）
樋口　　全 さん（会員）
が、御逝去されました。
謹んで、お知らせいたします。
ご冥福をお祈り申し上げます。

平成28年度 総合的な学習の年間予定表

	1学期			予備日		2学期			予備日
5月	6(金)	平野小	勾玉づくり		9月	29(木)	東小	土器づくり	
	10(火)	生駒南小	見学		10月	4(火)	南小	土器づくり	
	11(水)	北小	見学／勾玉づくり			6(木)	平野小	土器野焼き	10/7(金)
	17(金)	普賢小	見学			13(木)	北小	土器野焼き	10/28(金)
	25(水)	北小	火燃し、炊飯、脱穀	5/27(金)		20(木)	平野小	火燃し、炊飯	
	24(火)	田小	見学			21(金)	東小	土器野焼き	10/27(木)
6月	2(木)	田小	火燃し、炊飯	6/10(金)		25(火)	南小	火燃し、炊飯	11/8(火)
	17(金)	田小	勾玉づくり		11月	24(木)	東小	火燃し、炊飯	10/25(金)
	23(木)	田小	土器づくり						
	24(金)	田小	土器づくり						
	30(木)	平野小	土器づくり						
7月	6(木)	北小	土器づくり	成果展示会					
	7(木)	東小	見学／勾玉づくり	平成29年1月27日(金)～2月1日(水)青垣生涯学習センター2階会議室					
	12(火)	南小	勾玉づくり	【準備 1月25日(水)・1月26日(木)、片付け 2月1日(水)・2月2日(木)】					

編集委員　井上知章　植田洋高　大森初美
谷口敬子　花坂志郎　宮川真由美　福島道昭